

平成30年度地球環境保全活動支援事業交付決定一覧

No.	補助金交付団体	事業の内容 (要約)
1	大野豆プロジェクト 会長 二川 幹生	休耕田を活用して4種類の豆(大豆、黒豆、小豆、空豆)を栽培。地元の小学校・中学校・高等学校の生徒に対して地域学習の場を提供し、最近の豆栽培を例に地球温暖化への適応策等について環境教育を実施。 また、豆を食材にした郷土料理教室や「豆de料理コンテスト」を企画・実施、「地産地消」の輪を広げ、循環型社会形成の意義を周知・啓発。 一般家庭から、生ゴミから作ったたい肥を購入し(100円/10kg)、元肥として使用
2	かがわ自然観察会 代表 好井智子	香川県の自然の良さを見つけ、発信し、自然保護・自然教育活動の普及・実践、さらには地球温暖化による自然環境への影響などを調べ、地球温暖化防止活動についての普及啓発を呼びかける人材を育成するための講習会を、9月8日(土)～9日(日)、坂出市五色台にて、(公財)日本自然保護協会と共催で開催。この講習会を香川県で実施するのは30年ぶりで、かつて受講した人も高齢化し、活動が困難になってきている状況があり、新しい人材を育成するという目的もある。講習会を修了し、登録申請された方は、日本自然保護協会自然観察指導員として登録される。 なお、講習会には参加費(一般23,500円)を集めるが、テキスト代・自然観察指導員登録(自然保護協会会費、保険料を含む)、宿泊食費に計20,500円掛かるため、講師旅費・謝金、募集費用等について補助申請。
3	海守さめき会 会長 中條慎也	香川県内の小中学生を対象とした、海ごみ発生抑制に係る体験型環境学習会を過疎化が進む離島で開催。(社会科校外学習授業の一環として、県内小中学校の学校単位に参加募集案内を行い、参加者を40人程度募集) 「自分達の故郷の海は、自分達で守るんだ!」という意識を持ってもらうことと故郷の海を守るリーダー等の人材育成を図る。
4	栗林校区コミュニティ協議会 会長 松下保	特別名勝栗林公園を訪れる県内外の観光客は年間60万人を数え、年々増加している。同公園を取り巻く栗林地区の住民、地元企業、小学校児童・保育所園児・保護者・教職員、さらには観光客にも参加を依頼して、栗林公園の周辺(東門駐車場、東門歩道、地下道)の清掃活動を行うとともに、啓発活動の一環として、保育所・こども園の園児と高齢者が共同制作した作品(絵画等)を地下道に掲示し、交流を行いながら環境意識の向上、町を愛する心の醸成を図る。
5	(特非)こにふぁクラブ 会長 津久井進	近年、地球温暖化対策として森林の炭素吸収機能が注目されているが、木材価格の低迷が続き、林業労働力の不足や運搬コストが賄われないため、手入れが行われず、放置される人工林が増えている。そういった手入れがされていない民有林(3箇所)について、間伐及び枝打ちを行うことにより、残された木々を幹が太く健全な木に育て、二酸化炭素の吸収・固量を増加させる。さらに、得られた間伐材を有効的に利活用していく(化石燃料の代替)ことで温暖化防止に貢献する。 また、間伐することで残された木々は、大きく成長し根が強く張り、地すべり等自然災害の防止にもつながる。
6	香川大学ESDプロジェクト「SteeP」 代表 岩澤磨生	まだ食べられるのに捨てられている食べ物、いわゆる「食品ロス」は、日本では年間約500万～800万トンと試算されており、その半分に当たる年間約200万～400万トンは家庭から発生している。 当日廃棄される予定の食材を使って、参加者皆で交流を深めながら料理をし、食品ロス、そして地球温暖化について考えてもらう機会をつくる。(瓦町FLAG 8階市民交流プラザにて5回開催する外に、仏生山コミュニティセンター・大野コミュニティセンターにて開催)また、廃棄されるはずの食材の重さを計り、一年間を通してどれくらいの量の食品ロスをなくすことかできたのか、データとして見れるようにする。参加者はFacebookなどSNSにより募集する。
7	ざぶん賞中国四国地区実行委員会 委員長 岩崎正朔	水の環境を守ることの大切さを考えてもらうため、小中学生を対象に、水に関わる身近なことから環境問題や安全、生命などのテーマで創作文(作文、童話、詩、手紙など)を公募(全国)しているが、これに呼応して県内の小中学校を訪問し、創作文の応募依頼を行う。高松市において県内の小中学生の優秀作品を表彰するとともに、全国大会の優秀作品の展示、講演会(ざぶん塾)を開催することにより、参加者、一般の来館者に「水」「環境」等の大切さを喚起する。
8	有明浜の海浜植物を観察する会 会長 小西武利	スナビキソウ、ハマウツボ、ウンランなど貴重な数多くの海浜植物が育成し、瀬戸内海では最大規模の海浜植物群落を有する観音寺市の有明浜を上空からドローンで撮影して、植生分布図を作成するため、専門家の指導の下、海浜植物群落の特定を行う。また、一般市民を対象に観察会や研究者を招いての講演会を開催。 また、長距離の渡りをする蝶として知られる「アサギマダラ」の渡りの地が地球温暖化の影響で北上しているが、この蝶を惹きつける、スナビキソウの群落を試験的に増やすとともに、伊吹島でのフジバカマ増殖も継続して行い、アサギマダラが飛来する地域として目を向けてもらうことにより、自然保護、ひいては地球環境の問題への住民の共同意識の高揚を図る。
9	3万4000人のキャンドルナイトin小豆島実行委員会 会長 黒島啓	平成20年以来、今年は第13回「3万4000人のキャンドルナイトin小豆島」を開催。小豆島には88ヶ所霊場があり、そこで多くの廃ロウソクが発生する。捨ててしまえばゴミになってしまう廃ロウソクを、自治会・老人会・学校・各種団体など、たくさんの地域一般の方々の参加協力により、再度加熱し手作りロウソク(キャンドル)に変える。今年は、このキャンドル約7000個を土庄八幡神社に灯し、その灯りを楽しんでもらうとともに、参加者に環境保全等について考える機会とする。
10	(公財)オイスカ四国研修センター 所長 小野隆	オイスカ周辺の竹林(個人が所有している管理できていないもの)において、募集したボランティアと一緒にオイスカ海外研修生(あわせて約20名)により、竹の間伐を行う。間伐した竹は粉碎し、有機栽培を行っている農家に肥料として提供する。(不定期3回程度)
11	高松西カッパ友の会 代表 古井聡子	地球温暖化防止活動をテーマにした幼児にもわかるストーリー(食べ物を好き嫌いせず残さず食べる、子供でもできるCOOL CHOICEの紹介:約30分)の等身大の人形が演ずる劇を、幼稚園、保育所(4ヶ所程度)で公演することにより、幼い頃から地球温暖化防止の意識を持ってもらう。

No.	補助金交付団体	事業の内容 (要約)
12	(特非)瀬戸内オリーブ基金 理事長 岩城裕	陸路でのアクセスが困難かつ現地で回収したごみの持ち出しが困難なため、海岸漂着ごみが回収されていない場所(豊島・水が浦)において、海岸漂着ごみの回収を実施する。(2回、1回につき15名参加予定) 志々島等ごみの回収・持ち出しが困難な場所での海岸漂着ごみ回収の事前調査を行う。
13	(一社)香川県産業廃棄物協会 会長 松本英高	四国88ヵ所遍路道の清掃活動を地元住民(ボランティア団体を含む)とともに実施し、住民に対して環境保全の重要性をアピールし、環境美化意識を高める。 概ね急峻な場所にあり、不法投棄のゴミも多く、大型のものが多い四国霊場の山間部の遍路道を、専門重機(クレーン車、ダンプ車等)を保有している協会員企業と地元住民が協働して清掃活動を行う。 清掃場所: 国分寺遍路道(高松市国分寺町)
14	わだもんエコロジー 代表 寒川かおり	現代社会は竹を使わなくなったために山の荒廃など様々な問題を引き起こしている。竹の持っている可能性素晴らしさを紹介、竹の有効活用をすることによって、様々な世代の人が互いに学び、学びを通じて地球温暖化の問題や自然災害による被災の可能性等について知り、自然との共生につながるヒントを探る場や実践の機会を提供。 ・竹伐採見学会・勉強会(高松市塩江町、丸亀市本島町) ・周知・啓発イベント「竹と親しみながら、環境について学ぶ会」(さぬき市)
15	善通寺こどもエコクラブ 代表 井上修	平成30年11月に、「善通寺五岳の里市民集いの丘公園」において、環境保全・福祉の増進・まちづくり・食育・衣育の20団体による普及啓発活動や体験活動を実施するESD地域交流会(かがわESDまつり)を開催。(昨年度は765名参加) ESD: 世界の人々や、地球上の生き物、そしてこれから先の未来のことも考えて、みんなが幸せに暮らしていける地球にするために、私たち一人ひとりが気づき、主体となることができることを考え、行動するための学習や活動
16	(公財)オイスカ四国支部 会長 石井淑雄	山火事により0.3ヘクタールを消失した「まんのう町 尾の瀬山」において、平成22年から、まんのう町外3市町の山林組合、仲南町森林組合と協定を締結し、協働で「尾の瀬山 オイスカ憩いの森」づくりを進めている。今年度はこれまでの植林地のヤマザクラの苗木100本の補植と下草刈りを実施する。